どうみてもスライムです。ああもう、嫌になる。

ぱぴろん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
どうみてもスライムです。ああもう、嫌になる。

【Ｎコード】
Ｎ６５０７Ｙ

【作者名】
ぱぴろん

【あらすじ】
おいおいこれはどういうことだ。
俺は三十歳まで、妖精さんを貫いて、その誕生日に大魔法である、ある程度記憶を保持したままにできるという転生魔法を使ったのは覚えている。そのとき、すこしいじって、女子になるように設定し、あわよくば、体育の時間に、合法的に更衣室でニヤニヤするという計画だったのだ。
――が。
なぜにスライム……？

初心者ですがよろしくお願いします。

001

俺は現代日本で魔法使いであり、魔法使いだった。
前者は、日本で唯一の魔法を使えるという名家の唯一の子供ということ。片や後者は、ね……。
そして、もっとも魔力が高まるという三十歳の誕生日に、俺は大魔法を使った。
それは、転生。
いままで、我が家最強の魔法使いと言われた開祖しか使え無かったという魔法だ。
この魔法の利点は、記憶を持ったまま転生できること。
そこで俺は考えた。
なら、女の子に転生すれば、合法的に堂々と覗きが出来る、と。
例えば、体育の授業に着替える時。ボディタッチと称した……（ここで一度意識が途絶えた。清廉なる妖精にはきつすぎたのだ）。
嬉々として呪文を唱え、ついに幸せの一歩を踏み出した――……のは、間違いで、踏み出した所は落とし穴だった。
流れる川に自分を映してみた。緑の体表からマグマのような泡がポツポツとわき、その上に乗ったのは、やたら大きな一つ目と鱈子唇というレベルを通り越した大きさを持った口。

どうみてもスライムです本当にありがとうございましたっ。

指定に『人間』を入れるべきだった。もう遅いけど。だが、せめて一言言わせて欲しい。
どうしてこんなグロいの？　と。
国民的に有名な、肉まんにもなった青いスライムならまだしも。

あれなら、女の子に、「きゃーかわいー」で、胸に抱かれてぐふふが出来るのに、コレじゃあ別の「キャー」になるんだけど。
しかも、転生というのは、その世界に、実際にいる生物しか出来ないのだ。つまり、ここは、異世界ということになる。
よし、一言言わせて。
……帰りたい。
突然、ガサガザ、と、葉がこすれ合う音がした。
なんだろうか。
好奇心が疼く。何か危ない生物かもしれまないが、俺は緑色で周囲は草ボーボーの上に木々がある。景色と一体化しているので大丈夫だろう。
ぬるぬるとナメクジのように這って進む。ちなみに、俺の嫌いな生物ランキングではぶっちぎりの一位だったナメクジだが、たったさっき二位に転落した。　見やすい位置に移動すると、二人の人間がいた。
やったぜ人間だ！　と挨拶しようと思ったが、悲しいかなこの躯はスライムで出来ている。血潮はネバネバ、心は中学生。幾任もの合コンは（お呼びがかからないから）不敗。ただ一度の経験もなく、ただ一度の友達もなし――などと忘れられた過去を思い出していると、彼らがなにをしているのか解った。

お盛んなこって……。

全裸の男女がいた。ここ危ないですよと注意しようと思ったが、如何せんスライムだ。つまり、俺には注意することが出来ないため、ここで、彼らが危なくないように指を加えて（比喩的表現である。指というより腕がない）見張っておくというのが筋だろう。なんて優しいんだ俺は。

なぜか血涙が流れた。
おそらく、一生でもう二度と無いであろうこの機会。一つ目ではあるが目を皿のようにして凝視しておこう。
ふむふむと、人間の時なら出来たであろう考える人のポーズを想像していながら見ていると、なんだか恥ずかしくなってきた。所詮、中身は妖精にすぎないのだ。一つ目で鱈子唇のゼリー状の物体が頬を染めているという、明らかにファンタジーでなくホラー・オカルトジャンルに行かないといけないという状態になっているのは描写するのを避けておく。俺は零の実況動画をみたあと、トイレに行けなかったのだ。
鼻血の代わりに緑の液体を垂れ流しているのは流石にきつい。ということで、鼻血の時の対処法としては、上を向くことだと聞いたことがある。だから、スライムにも適用させてみる。

熱線が通り抜けた。

何を言っているのか分からないと思う。俺もだ。
順を追って説明する。
俺が上を向こうとして、目を推移させている途中で、ビームが飛びだして、立っていた男の頭上を通過した。
原因の考察に入る。
おそらく、目を皿にした所為だろう。
……目皿ビーム（仮）と名付けよう。これなんて、終末兵器スライム？
しかしこれはまずい。俺は人殺しをしかけてしまった訳だ。俺の無罪を主張しておかないと、見つかってしまった時に怒られる率があがってしまう。加えて俺は肩がぶつかっただけで土下座できる礼儀正しい人間（だった）。

俺は謝罪を口にするため茂みから目一杯ジャンプした。
さて。
皆さんおわかりだとは思うが、ここは異世界。よくある異世界言語補正によって、話が出来ると俺は踏んでいた。
それがこの結果である。

「……コポォ！」

これが神の悪戯か。
異世界スライム言語補正がかかっていた。
だらだらと冷や汗を掻く俺。取りあえずお茶目にウインクして誤魔化すしかない。何せこの躯は後は、表現する方法が「コポォ」しか無いのだ。
パチリ。
なぜかオカマキャラでよくある筋肉質のオッサンのウインクが俺の脳裏をよぎった。
二人は完全に石化しているようだ。
そりゃあそうだろう。何せ、いきなりビームが駆け抜け、そのビームは当たった木々を円形に抉るほどの威力があるのだ。そして、明らかに「みちゃだめ！」な見た目をしたスライム。極め付きには二人とも生まれたままの姿。ある意味俺に対してはもの凄い精神ダメージあるのは余談だ。
すると、止まっていた男が苦悶の表情を浮かべつつ、下に置いてあった西洋剣を構えた。ちなみに女性は緊張しているのか一歩も動かない。スライムに情事を見られたことに対する羞恥心だろうか？
別に俺は人間でもあるまいに、見られても特には気にしないと思うのだが。大穴で一つ目フェチ？　まあ、俺にとって役得の一言に

尽きる。

「……っう！　はあ、はあ……なんつう強力な魔眼だ……超人級はあるか……？　赤い目ということは吸血種の魔眼……俺は耐魔の眼鏡をつけているのに効果があるなんて……」

何かよくわからないことをブツブツと言っているので、返事がてら、「コポォ」と返してやろうか？　いや待てよ……。

「コポォ」しか言えないってことは、相手に何を言っても分からないということだ。つまり、俺が何を言ってもアイツの怒りを買うことはない。

「コポォー、コッポコッポ。コポォコポォコポォコポォコポコポォコポォ……」（あー、テストテスト。モゲロモゲロモゲロモゲロモゲロモゲロ！）

なにか、溜まっていた感情が吐き出されて、すごくすっきりした。今ならタグに、キレイなスライムとつけられるくらいに俺は爽快感を覚えている。

男はというと、剣を下におき両腕を天に掲げ、両足をがに股にして踊り狂っていだしていた。

コイツ……頭可笑しい……。

女も唖然としているようで、先程の四つん這いからピクリとも動いていない。

こんなシュールな光景だが、俺は一言言いたい。いい加減服を着ろ、と。

誰が好き好んで腐れイケメン電波眼鏡の裸ダンスを見ないといけないのかと。葉っぱで隠すのなら許してやろう。

そして、確かに俺は女性の裸を見て興奮をする。しかしだ。俺はそれ以上に服を着た女性が好きなのだ。せめて隠すところは隠せっ

！　ちょっと目を瞑っててやるから！　あ、胸は両腕をクロスさせる隠し方でお願いします。
つまり、何かよくわからんが、今は逃げるチャンスということだ。
ということで、スライムは逃げ出した！
うまく逃げ切れた！
多分上から見たら、ゴキブリのようにみえたことだろう。
一息つく。
一心不乱に逃げ続けたので、知らぬ間に森から抜け、草の無い砂漠に立っていた。
そう言えば、俺の食料はなんだろう。未だおなかが減っていないのは幸いだが、これからもそうとは限らない。
まぁその時はその時で、惹かれた食べ物を食えばいいだろう。
二人人間がいたということは、人里があの森に近いのかと思ったが、ううむ、背後に見える森以外はすべて砂か青い雲一つ無い空。
ふむ。
森に行けば、二人の変態。砂漠は未知。
なら俺は前に、未知に向かって突き進むのだ！
ということでゆっくりと前に進む。ちゃんとした魔法が使えばいいのだが、この体に手はないたため陣は書けないし、詠唱も然り。
脈々と受け継がれてきた我が家の固有魔法は体が違う以上無理。もうそれは失われた魔法。先日の俺の転生で。と同時に地球に魔法使いはいなくなった。俺は一人っ子で、両親はすでに他界している。
ちなみにかなりの殺戮が可能な魔法ではあった。
まあ、終わったことはさておいて。
ただいま俺は、絶賛絡まれ中だった。

「ジン見てこのグロいの。相当に凶悪な加護がつけられてるよ」
「そいつを俺の近くに持ってくるな。まったく……お前も靴が汚れるぞ」
「ジンはいい主夫になれるよ。そろそろ誰かと結婚したら？」

「俺の年齢と釣り合うほどの女はそうはいないだろ」
「だろうね。アンデッドか不死鳥か。うわぁ……」
「お前もな。ムニュ」

完全に俺が蚊帳の外で、二人は会話している。
ジンと呼ばれた方は、銀髪を顎ほどまで垂らし、俺と同じ灼眼。身長も百八十よりうえだろう。顔も整っているから、白いカッターシャツ、黒いズボンが似合っている。
ムニュと呼ばれた少女は一言で言うなら女神だ。今、その美しい足に穿いたスニーカーで踏まれているのだが、これはたまらん。いきなり、ジンという男の背から降りた彼女に見ほれていた間にはすでに俺は足の下だった。
彼女は俺にとっての理想の体現な気がする。
墨色の腰までである髪はローブにしまわれ、血のような色をした瞳は吸い込まれそうなほどの魔性がある。
今踏まれている所為でローブの中を垣間見ることが出来るのだが、胸の膨らみがない。まあ、身長が低いからそんなものだろうが、願わくばそのままでいてほしい。
いっそスライムになったのもこの時の為ではないかとさえ思う。今ぐりぐりとされているのだが、一言で言うのなら幸せである。

「でね、このスライムさぁ、知ってる加護というか、協賛？」
「つまり上位世界――神々（きちがい）の巣窟の知り合いと造ったのか？」
「当たり。加護の名前は『ぼくがかんがえたさいきょうのもんすたー』」
「……どんな力があるんだ？」
「あんまし覚えてないんだけど、確か、目に力を集めるとふれた物を分解するビームがでる『ぴっころびーむ』に、ウインクされた、視界内にいる相手は石化される『オカ魔眼』ならおぼえてるんだけど……。あ、後、呪を唱えるとその対象が踊り出す『愚者の舞踏会』

かな」
「相変わらず、アホしかいないな。上は」
「個人的には真ん中が一番怖いけどね」
「中位世界――お前曰わく忠義（マゾ）の楽園だっけか」
女神様は目のハイライトを消した。そんなお姿も素敵！
「あそこはね、上位世界の住人が無条件で神々しく見えるらしいんだ。だから、ましな人でも『自分をぶってください』で、玄人になると速攻で失禁する」
「それは……気の毒だな……」
俺は完全な放置プレイをされているが、それはそれで幸せだ。
「それにしても、このスライム結構凄い偶然が重なってる。転生魔法の跡があるんだ」
「へぇ……ってことは意志があるのか」
「うん。試しに話しかけてみればいいよ」
「いや、俺はこういうドロドロしたのは苦手なんだ。しかも、なんかお前に踏まれて幸せそうなのが気持ち悪い」
「……ん？　あぁ、たぶんこのスライムが“×××”の加護を受けた使徒だからかな。彼は僕の非公式ファンクラブの一員で、その彼の趣味がコレに流れてるんだよ」
「お前が上にいたくない理由が分かったよ……」
はぁ……いい匂い……。
「俺、吐き気がしてきた……」
「……だね。邪魔だからどっかに蹴飛ばしておこう。倒すにも、使徒は強いから面倒だし」

すると、俺は妙な浮遊感を感じたあと、気がつくと空を飛んでいた。
羽根が生えた訳ではない。おそらくムニュ様のお足によって俺は光栄なことにも蹴り上げられたのだ。ちなみにパンツの色は黒かった。
数秒程たつと重力に負け、俺は落下していた。涙が出そうな程恐いが、ムニュ様のお陰と考えるとなぜかにやけてしまう。
むにゅり、とまるでウォーターベッドの上に落ちたみたいな感覚があった。何かの上に落ちたおかげで、どうやら、助かったらしい。
何の上に落ちたのか確認してみる。
同族だった。
とかく大きい。俺のサイズがバスケットボールくらいなのだが、そいつは、俺が三十人くらいの大きさだ。まさにキングスライム。
すると、俺とキングの一つ目がぶつかった。そして俺は思った。

あら、いい男、と。

……あれ？　何を言っているんだ俺は。
自分の思考をかき消すために、飛び上がり、下に体をぶつける。
だが、下は柔らかいキングと――……柔らかい……胸板……。
おおおお――？　は？
「大丈夫かね？」
「……は、はい」
「ふむ、それは良かった」
あらやだ、タイプ……渋い声、好きなの……。

どうしたんだ俺は……？　キングをみる度に体が熱くなる。これは――。

――恋する乙女？

いや待てええええい！
俺、男、人間（だった）！

「ふむ。本当に大丈夫かね？」
「あ……ははははい。大丈夫です……」

節目がちになる俺。キングと目を合わせると胸が高鳴る。
なんで、私、きちんと喋られないの……。
思わず肩を――。
キングの頭から飛び降り、地面に体当たりする。
あっぶねぇ……意識をもってかれかけた……。一人称まで変わりかけてたぜ……。
だが、何故だ？　コイツは――あ、好きな眼の形。口も柔らかそう……。
落ち着け俺。コイツと目をあわせてはだめ。見ては駄目だ。見ては駄目だ。見ては駄目だ。見ては駄目だ。
突然、閃いた。
俺は、転生魔法をどう設定した？
『女』だ。
いらねえええええええ！　え、スライムって分裂で増やすだけじゃないの！？　無性じゃないの！？
つまり、俺はこの、ダンディーな渋くて目の形がよくて、口が柔らかそうで、絶対に性格もよくて、一生を添い遂げたい彼に発情し

ている――？

俺は、どこの落下系ヒロインですか？

002

さてさて。

主人公でありながら、スライムルートという、新ジャンルを不本意にも歩もうとしている俺だが、当初の目的を忘れていなかった。俺は、スライムもおーけーで人間（女）もおーけーな、スライムということだ。

そして、この作品についているガールズラブはスライムと人間（女）の組み合わせという意味になる。ということはだ。作者がこれをつけたということは、未来的にはキャッキャウフフな展開もあり得るわけで、もし今、シブイおっさんスライムルートに入ってしまえば、果ての無い混沌を生み出すということになってしまう。

つまり何がいいたいのかと言うと、このフラグを叩き潰すしかない。

だが、俺を助けてくれたこの恩人（スライム）の心を傷つけないようにしなければならない。このスライムに非はまったく無い。尊敬するくらいいいやつだ。

幸い、大概のこういう落下系ヒロイン（俺）などの「不良や追っ手などの危険から助けられた」系のヒロインは基本的にメインヒロインにはなれないのだ。ちなみにそれは、やたらと主人公に対して優しくて通い妻のように朝ごはんを作りに来るお隣の幼馴染がメインヒロインになることと同様の確率である。そしてかなりの高確率で中盤あたりでヤンデレと化したり、もしくは死んでしまい主人公の成長の糧となったりする。最悪の場合だと、メインヒロインなのに人気投票で、自分のサーブファントに負けちゃったりすることもある。ちなみに俺はツンデレより彼女が一番好きだ。黒くなったときの。

また、ライトなノベルで、タイトルに自分の名前がついた落下系のメインヒロインがいたとする。しかし、彼女は一巻はともかくとして、二巻、三巻……と積み重ねていくうちに段々と空気（エアヒロイン）になって

しまい、結局三巻あたりで、ビリビリした二万人くらいいる妹や、特にその姉にメインを奪われ、ただのハラペコシスターとなってしまったりする。

前述した通りのパターンで行くと、つまり俺は結局メインヒロインになったりすることはないので、主人公（キング）に、メインヒロインより主人公に対する惚れ率が少ない。メインヒロインの王道であるツンデレなんて、俺のもっとも嫌うジャンルだから、自分がそんな態度をとるなんてこともあり得ない。

この考察を元に結論を下すと、普通に友達と接するようにキングと接するのがフラグを折るための最高の選択肢、ということだ。

「ありがとうございました……けほっ」

ここは存在を消すために、おしとやかで、かつ、存在が消えてなくなりそうなほど消えてしまいそうな小さな声で、女性としての本能がでないようにするため、ウインクをするかのように目を伏せる。ツンデレの要素など無く、これならただのモブスライムGくらいの存在として認識されることだろう。

ちら、と目を開け、キングを見てみる。

……顔を真っ赤にして、固まっていた……。

俺は重大なことを忘れていた。大概の男はツンデレ萌えなどとふざけたことを抜かす野郎が多いが、それより一つ強いジャンルがある。

それは、病弱系ヒロイン。

制限としては、ハーレムでなく、主人公と一対一の場合で無いといけないのだが、見る限り、周囲にヒロインは居ない。そして、その病弱系ヒロインは基本的にどんな性格をしていても赦され、美化される。得にツンデレが付随したときは最強だ。ちなみに俺は不覚にもツンデレもいいなと思ったことがあった。半分の月を見た時に俺が泣きそうになってしまうのもその所為だ。俺は聞いた話だが、

ある男の友人がそれにあり得ないほどにはまり、それをやけに推してくるので逆に、「他人に薦められると読みたくなくなってくる」というとても面倒な性格の男は、最初は、いや、よまねーし、だったら桃太郎読むし、と言っていたのだが、あまりにもしつこいため、ついに「仕方ねーな」と折れ、不覚にも読んでしまい、見事にはまってしまったということを聞いたことがある。そしてこうも言っていた。「実写なんてなかった」と。

話を戻すと、先ほど俺は口の中へと侵入していた砂の所為で咽てしまい、キングを上目遣いで見てしまった。

だから主人公によくある、「美少女の上目遣いを見て、無意味に顔を赤くし動きを止める」という病気をキングは患ってしまったのだろう。

結果的にだ。俺はスライムルートに入りそうになっていた。

しかし、俺はここで重大なことに気がついた。

俺が主人公、ということだ。

何が違うの？　と聞かれれば答えたくないが答えなければならないだろう。

そう、俺はヒロインでなく主人公で、女主人公だ。

これはかなり結果の変動に影響を及ぼす。

男主人公のメインヒロインは基本的にツンデレという理論があるように、女主人公にもそれはあるのだ。

そうそれは、鉄火面系どSイケメンだ。

どういう感じなのか説明すると、基本的に逆ハーレム系は、まず、女主人公は平凡な容姿をしているか、もしくは「実は誰にも知られていないが、顔を隠している髪を切るとまあ不思議」系美少女、さらには「自分の容姿に気がついていない性格の良い鈍感な完璧系」美少女に分かれる。

その前提条件はスライムの美的基準なのでどうか解らないため、上のどれかに該当する、と仮定する。

するとだ。

逆ハーレムの面子は、メインになる可能性が高いのは、先に書いた鉄火面で実はどSで主人公が可愛くて、主人公だけをいじめるクール系。ちなみに高確率で言うセリフは「いけない子だ……」のような一痛い（甘い）セリフ。過去編に入ると、特にファンタジーなどではこういう系統が王様だった場合、「やたらと毒殺されかける。で、その黒幕は側室の傲慢な息子」の場合が多い。俺様口調を持つこともある。

次に、身長が小さく、ショタっぽい王子様系。こういうタイプはやたらと女装したりもする。腹黒というのも結構な確率で付随される。基本的に過去編、特にファンタジーでは「側室の王子だが、本妻の息子より優秀」とかいう設定が入ることが多い。

そしてこれが最後なのだが、このキングにあてはまるであろう、「父性系ダンディーイケメン」が入ってくる。しかしこういうタイプは、主人公を影から支えるタイプで、メインになったりはしないことが特徴だ。ちなみに例外として、風早くんのようにテライケメンだと、心が綺麗過ぎるので、逆ハーレムなどにはなったりしない。

ということで、俺はドS系にさえあわなければ、望んでも居ない逆ハーレムということにはならないのだ――。

「なんだ、そいつ……俺様の庭に入りやがって」

「ねえねえ、僕の花壇を踏むとか何様？」

そして、フラグ（二重の意味で）が建つことがあるので気をつけよう、というのが本日の教訓である。

００２（後書き）

注意。四人ともグロ系スライムで、人間が聞くと「コポォ」しか言っていません。

003

俺は見事に逆ハーレムフラグを着々と不本意ながら建設しているわけだが、それ以上に死亡フラグが色濃い。

二人の緑色の体表を持った、グロ系スライムに殺意を向けられているのだ。

その理由は、何者かによって、唯一のまともそうなスライムであるキングが石化されてしまったから。その冤罪を俺はこのアホ共にかけられているというわけだ。おそらく、機関のえーじぇんとによる陰謀に違いない。エル、プサイコンガリ。

どうでもいいが、男スライムは女スライムより体が大きいっぽい。こいつらも、キングと同じくらいの大きさだ。

確かにこの場にいたスライムは俺だけだ。しかし、こんなか弱い（？）スライムがそんなこと出来るわけがねーだろ。お前らの目は節穴か！

なんだかむかついて来た。ここは言い返してやろう。俺も（元は）男だ！　散り際くらい、根性を見せてやるのだ。幸い、キングのように真のイケメンではないからだろうか、胸がド☆キ！　などということは無いから噛むことはないのだ。

「おい！　いきなり、人に殺意をぶつけるとか、にゃにすんにゃこりゃー！」

そう、生きていたときは引きこもり。

いままでのことを思い返してほしい。いままで一度でも目を見て話そうとしたことがあったか。それは否。

最初の「コポォ！」も実は「ごめにゃさい！」だったように、俺は長年人と話をしなかったため、トークスキルが皆無なのだ。ちなみに、最後に話したのは、なんちゃって美人の栗色の髪をしたコン

ビニ定員に、「あ、チャック全開ですよ」と言われたときだ。
俺はもう殺されるだろう。あんな強大なスライムずに襲われたら、俺などすぐにぺしゃんこだ。
ほら、いまにも顔を真っ赤に――……。

「……フン」

俺は馬鹿の中の馬鹿だ。００２話で何を語った？　こいつはドＳ系鉄火面のイケメン。
そう、これは見事に王道に入り込んでしまったようだ。
解らない人のために解説すると。
どＳ系は基本的に王様が多く、王様の妃を選ぶため、後宮などで女の醜い争いが勃発したりして、「もう、女なんて信じられない」とかぬかしおり、イケメンなのに本妻がいなかったりする。
そしてここに現れるのは女主人公（俺）。
自分は王様なのに、面と向かって話せるやつがいるのか？　フン、面白い。こいつを後宮に入れてみよう。とかいう本当に迷惑極まりないことを考えているに違いない。
そして、お前をいじめるの楽しい、みたいなふざけたこと言うのだ、おそらく耳元で。
しかも、この思考さえフラグなのだ。
一般的にどＳ系の王道としては、「女主人公は最初どＳが嫌いだが、だんだんと目でおってしまうようになる……」みたいな流れになってしまう。そう、まさに俺の思考がその初期段階と言ってもいいだろう。これがシュタインズゲートの選択！
このまま流されてしまえば、俺はメインヒロインになってしまう。
だが、俺には必殺の一つ手がある。
覚えているだろうか。そう、目皿びーむ（仮）だ。しかし、同属を殺すなんてことは俺には忍びない。
ということで、俺にダメージがあるが、とりあえずやるだけやっ

てみる。それをやって駄目だったら、また逃げ出すしかない。
「ふもふもふもふもふも。俺はちきゅーじんのへいたいきょうはにきたばりゅたんへいじんのひほりである。そひらのたひほおうひだいでは、わがほひとへんほうになるはろう」
そう、俺は電波系スライムになりきる。
電波ちゃんがドSルートのヒロインになるなんて俺は聞いたことがない。これこそ逆転の一手！　くくくはははははは！

「にいさん、こいつ頭おかしいよ！」
「いや、なかなかに調教しがいがあるじゃねぇか」
「なん……だと……」

そうか。どんなに抗っても、惨劇は変えられない。運命を立ててしまったら、もう変えられないというのね。そして、ショタくん。本当にありがとう。君がこの小説唯一の常識人だよ！
――と思っていた時期が俺にもありました。
そう、ショタの口から飛び出た一丁の銃が、どSの眼球をぶち抜いた。
何が怖いって、口から左腕がにゅ、って出ているのだ。俺はホラーが無理だとあれほど言ったのに！
もう、どういう状況か、まったく解らない。とりあえずフェイリスたんの所へ行くお！

「ふう、危なかったですね」

ひえええええええええええ！
口から人が出てきた。あ、あああああ……。
「あなたは加護を持った方のようだ。計画とは違ったが……まぁ上手くいったか。あと、私はこういう者だ」
ショタスライムから生まれた、金髪で百五十センチくらいの左サ

イドテールちゃんは名刺を取り出し、俺の口の中へと放り込んだ。
途端、彼女の情報が浮かんできた。
×××の加護【聖女】ソフィア。
そして、俺は果てしなくどうでもいいことを思った。
ヒロイン、襲来？

００３（後書き）

やっぱり大事ですよね、ヒロイン！
だが、主人公はスライム。
そう人生はうまくありません。

004

聖女によると、この世界というか、下位世界と呼ばれる選ばれた物体は、上位、中位世界に存在する神などによってあたえらた【加護】という物を与えられる。ちなみに、俺のいた世界やこの世界は下位世界と呼ばれるらしい。

で、【加護】は一柱につき一つの物体で、なんと俺、というかこのスライムは【加護】があるらしい。

なぜ、俺やスライムと【聖女】が会話を出来ているのかと言うと、【加護】によってもたらされた力の一つだそうだ。ちなみになぜ聖女――ソフィアがスライムのヌイグルミを着ていたかというと、加護を与えた存在が、「そういやー、友神と一緒につくった最強のスライムがあるんだけどさ。捜してきてよ」というわけで、加護を与えられた存在は【使徒】というのだが、そいつは与えた存在に絶対遵守らしく、俺を捜しに来たらしい。

ということは加護のある存在である俺が、上の人には絶対遵守しないといけないので、かなり欝だ。俺は縛られても嬉しくないのだ。縄で縛るんならまだしも。

そんなことを考えているとソフィアがいきなり、独り喋りだした。

「あぁん……神様、私の中にきてえええええ！　ん、あぁああん！　神様が入ってくるのおおおおお！　神様神様神様――っ！」

言葉を失う、というのはこのことか。金髪美少女が羞恥に悶えている。透き通った目はトロンとしており艶かしい。そして羽織っていたパーカーを脱ぐと、彼女はなぜか水着になった。眼福眼福。

「……っと。おぉぉお！　これが、アイツらの作ったスライムかぁ。

完成度たっけぇｗｗｗにしても、うわっ、グロっｗｗｗｗｗお？　俺の要望した『チンカラホイ』もきちんと実装されてるじゃんｗｗｗマジ、乙ｗｗｗ流石ムニュの『オカ魔眼』テラチートｗｗｗｗｗうわ、中二病の『愚者の舞踏会』地味だなぁｗｗｗｗあはっはははは！」

なぜか解らんが、このソフィアの中に居る何かは、俺とひどく性質が似ている気がしてならない。

スタイルの良い水着のソフィアもどきが大爆笑している。スライムの顔をみて笑うとか呪ってやる！

「ん、お？　おお？　お前俺に呪いをかけようとするとか、マジ乙ですｗｗｗｗｗｗあれ、こいつ女じゃんｗｗｗｗｗクッソワロチｗｗｗｗ」

なんだろう。これが同族嫌悪というヤツだろうか。

ネット上で、自分がこんな感じで書き込みをしてたなんて、恥ずかしさを通り過ぎて怒りがわいてくる。草うぜえええええ！

「はー、腹が痛い……」

「ンダテメェ。誰だコラァ」

俺は確かにスラスラと会話が出来ない。だが、似たような雰囲気のやつにはくってかかれる。しかも、俺は加護とやらを持っているらしい。負ける気がしない。ガクガクブルブル。

そう。勝ち目があると、俺は強気になれるのだ。

「は？　俺に喧嘩うるとかワロッシュｗｗｗｗ身の程を知れよｗｗｗｗ絶対お前友達いないだろｗｗｗｗいても絶対お前のことパシリくらいにしか思ってねぇよｗｗｗｗ」

「は？　お前こそ、スライムだからって舐めてんじゃねーぞコラァ。童貞ごときが調子乗ってんじゃねぇしwwwお前こそ”はがないだろ”ｗｗｗ”俺は友達がいない”の略ｗｗｗｗ」
「……」
「……」
「いや、なんかすまんかった……」
「いえ、こちらこそ、あなたみたいな方に生意気言ってすみません……」

お互い、抉ってはいけない傷というのがあるのだ。このように葬式みたいな雰囲気になってしまうから。

「……そうだ。捜してるやつがいるんだ」
「はぁ……」
「こう、ちっちゃくて胸が無くて、黒髪赤目の、そのペロペロしたくなる太股をした少女なんだが……」
「あいました。ＹＥＳロリータ、ＹＥＳタッチみたいな子ですよね。なんかものすごいイケメンと一緒に歩いてました、確かジンとか言う人でした」

スフィアの中に居る何かは顔を顰めた。

「あんの、クソヤロウか……よし、ぶちころ――あふん」

バタリ、とソフィアが前に倒れていた。後頭部には、スフィアの三倍ほどある岩石が当たっている。よくこれで倒れるだけですんだな。
その後ろには、パンパン、と手を叩く執事服を着た、金髪碧眼ショタが立っていた。

「――ったく、あんなイケメン殺しちゃったら勿体無いし、ムニュが泣いちゃったら困るじゃないの、何してくれてるのかしらね、蛆虫」

なぜ……女言葉……？　そして、彼は俺と眼があうと、俺の存在に今気がついた、といわんばかりに首を傾げた。

「ん？　あっ！　あなたは、お？　あのでくの坊、私の『イケメンホイホイ』つけてくれてるじゃない。今度お礼にハーゲンダッツの蓋を舐めさせてあげようかしら？」

ショタがやけに高圧的に女言葉で話している。シュールだ……。

「ま、いいわ。……おい、蛆虫。とっとと捜しにいくわよ」

「ん、んあ……っつ、クソ痛えな……――げ、なんでお前が居るんだよクサレビッ――」

ソフィアの頭に拳骨が落ちると、そのまま彼女の頭は地面に突き刺さりクレーターを作り上げた。その余波で起こった地震の所為か、俺の体まで揺さぶられて、吐き気がする。おそらく、俺が人間だったらちびっていただろう。

そんな俺をよそに、二人は消えていった。

あれ？　普通、異世界にきたら俺ＴＵＥＥＥＥってなるんじゃないの？　拳が霞んでたよ……あぁ、日本が懐かしい……。

閑話、「人外魔境」（前書き）

とりあえず、“下世界の”チートを書いてみました。
チートしかいねぇｗｗｗ
と言っていただけると幸いです。

閑話、「人外魔境」

この世界では魔物がいる。それに対処するため国では騎士団により国を防衛していた。しかし、国だけの戦力では心元ない。ゆえに、それを埋めるのを商売としている会社がある。

『戦闘用カンパニー』。

これは、人や魔物の依頼による殺害許可を得た会社のことをさす。業務内容は、殺害か捕縛。依頼者は国もあれば、近所のお婆さんだったり、よりけりだ。まぁ、普通に事務員もいたりするのだが、もちろん誰でも入れるのではなく、まぁ場所によりけりだが、基本的に面接や筆記試験、そして戦闘による試験で社員を決め、月額で定額の料金を支払うという仕組みだ。もちろん、依頼者の評価が高かったりするとボーナスが入ったりするから、端的に言えば、戦闘を生業にする会社、ということだ。

会社というのは信用が第一と言っても過言ではない。

だから、ごく稀にやってくる異世界人が、「すんません、ギルド登録したいんですけどー」と言い、事務の人が、「は？　じゃあ面接受けてください、履歴書もちゃんと書いてね？」と懇切丁寧に言うと、なぜかその異世界人が「俺と一番強いやつと戦わせろ。で、勝ったら入れろ」と言ったりするので、受付の人が信用の出来る人が云々と説明するのだが、「じゃあクエスト受けるから」とか変なことをのたまい、受付の人を困らせたりすることがあるのは余談である。ちなみに、偶然一番強いやつ（社長）が通りかかったときにボコボコにされ、「あれ、俺は最強チートでは？」という言葉を残し、それが流行語になったのだが、その彼は今、ただの平社員として働き、受付の人と結婚した。いまやエリート社員。

横道にそれたが、『戦闘用カンパニー』は許可の下りた十の会社が名乗ることを赦されている。

そして、月一回、カンパニーの代表者――つまりは社長が集まっ

て魔物や、指名手配犯の動向などを話合う会議が開かれる。その名前は『十人会』。そして『十人会』の最大の目的は、戦闘用カンパニーによる犯罪の粛清であり牽制。一つ一つが一国に相当する戦闘用カンパニーが犯罪を起こせばそれを抑える者は戦闘用カンパニーしかない。ただの一国ではたちうちできないからだ。

確かに今、カンパニー一つが一国に当たる、と書いた。しかしそれは語弊がある。”社長を除いて”一国に相当する、ということだ。そして、この世界の最高峰が十人ここに集まり、利益を得るため、陰謀が渦巻く混沌が支配する――はずなのだが。

「では、今から会議を始める」

各々が円卓に座り、静かにしていた中で、一番筋骨隆々で、スーツを着た坊主頭の男性が口を開いた。

彼は『十人会』の序列第一席である、フォルテだ。今居る中で近接戦闘最強。肉弾戦を好み、拳一つで山を叩き割る。一対一において彼に勝るものはこの場でさえいない。それに魔法もこの面子と張り合っても決して劣りはしない。クラスは【災害級】。二つ名は【救世主(じょうしきじん)】、【最強(まともなひとだいひょう)】、【抑止力】など。所属カンパニーは【ドラゴニート】。チートの一角。

「よしよし。おねーさんと一緒にいいことしようねぇ～。朝までね。ああん、泣かないの。ここにいる暑苦しいゴミ共の所為よねぇ～？

困ったわ。大丈夫、あなたとクルクたん以外、すぐ全部殺しちゃうからっ！」

髪も目も真っ赤な、長身で抜群のプロポーションを持ち、赤のドレスに身を包んだ女性はロザリオ。彼女は八歳の女の子を膝の上に乗せ、遊んでいる。生粋のロリコン。

ここにいる中で、最も魔法に長け、赤ワインを飲みつつ、その周

囲は彼女が展開した魔法で散りも残さないことで有名。クラスは【災害級】。二つ名は、【掃除屋（スイーパー）】、【傾国（おねーさま）の美女】など。第二席。所属カンパニーは【美女の楽園】。チート。

「相変わらず、ロザリーは過激で美しいよねぇ。今度、殺（や）りあおうよ。血の色を咲かせるんだ。ふふふはははははっは。想像しただけで心躍るよ」

鼻筋の通った美丈夫で、女性と見まがうほどの長い銀髪を垂らした長身の男性は、バレット。

いつもは落ち着いているが、戦闘になると狂戦士へと変貌を遂げる。何でも出来る、いわば上の二人を平均したような力を持っている。クラスは【災害級】。二つ名は【狂戦士（そうおん）】、【詐欺師（みかげだおし）】。第三席。所属カンパニーは【戦いの果て】など。チート。

第四席【聖女】ソフィア、神託により不在。所属カンパニーは【神こそすべて】。クラスは【災害級】。二つ名は【狂信者】【桃色（なんだかえろい）】など。チート。

「くはははは。皆のものよ。すべて我、混沌からの使い魔で、森羅万象からの脱却による神の采配で（略）我は世界を超越し魔界を統べる王の中の――」

ゴスロリのフリフリしたドレスを着て、黒髪をおかっぱにし、ツインテールをくるくると巻いた彼女がクルク。外見は小さく幼いが、胸は大きい。

呪術系の魔法を得意とする。二つ名は【破壊を尽くした悪魔の（略）軍勢の偉大なる王女（自称）】、【覇王（自称）】、【母性の刺激】、【最強（ただしロリコンに限る）】など。所属カンパニーは【愚者の杯】。クラスは【災害級】第五席。チート。

第六席。以下はランクが落ち、同等。

名前はカイル。金髪で眼鏡を掛けた人。あのスライムが最初に出会った。なんちゃってイケメン。退魔が得意。クラス【超人級】。黒いスーツを着ている。所属カンパニー【賢者の住処】。二つ名【賢者】。

第九席。クセのあるワカメの青い髪に、黒いスーツの男性。名前はシンス。二つ名にもなっている加護、【ケルベロス】持ち。所属カンパニー【矜持の所持者】。

第十席。

髪と瞳は黒と青が混ざり、おどおどして視線が下に向いている、小柄で細い青年がアルシュ。彼も黒いスーツを着用している。遠距離のスナイパーで、世界最高の射撃能力。二つ名は【新入り】、【最弱】。所属ギルドは【静かなる終焉】。銃器チート。

残りの、七、八は欠席だ、

七の休んだ理由が寝坊で、八がそのお守り。彼らは、十人会の中では有名だが、いつも欠席するため巷では無名に等しい。

七の二つ名は【破壊神】、【触るな死ぬ】。八は【お守り】、【最期の砦】。これらは、十人会の彼らに会ったことのある人間全員で決めたのだが、これら四つがいち早くでて速攻で誰も反対なく決まったことは余談だ。彼らは戦闘用カンパニーに所属してはいない。

――と、各々が各成果を報告し、質疑応答の時間が始まった。すると、彼らのなかで最強であるはずのフォルテの、胃がきりきりと痛みだす。人外共を相手にし、場を納めきるのは彼だけであり、頭痛の種だった。せめて【新入り】のアルシュだけはこのまま常識を持っていてくれと神頼みするのが毎日の習慣となっている。

すると、【賢者】カイルが発言をした。

「では。なぜ、栄えある【十人会】に欠席者がいるのです！　【聖女】は仕方ないとはいえ、寝坊？　お守り？　ふざけているんですか？　即刻追放すべきだ」

実際そうなんだけど、そんな自殺行為をしたくないしな、と内心でフォルテは呟く。そして、カイルの言葉を誰が否定しても、結局血が流れるんだろうな、と遠い目をする。
彼の予想通り、否定が入った。そしてそれは最も入って欲しくない人だった。

「あぁ？　テメェ、ゴミの分際で、私の嫁らに話を移すとか死ね。掃除してやろうか？　あ、ごめんね。今怖いゴミをぶちのめすからね」

そう言う【掃除屋（スイーパー）】ロザリオはすでに背後に魔法を展開していた。これがすべて発射されれば国が一つ滅ぶほどの威力だ。慌ててフォルテが仲裁に入った。

「ちょっと待て、いまここで――」
「はははははははは！　ココで戦闘するんですか？　私も混ぜてくださいよ！　はははははは！」
「なにすんのよ！　アンタ、そんなに早死にしたいわけ？」

フォルテより先に割って入ったのは【狂戦士（うるさい）】バレット。ロザリオの魔法を掻き消した。すると、彼女は矛先をバレットに変える。もう、目にはカイルなど映っていない。で、その彼はというと、すでにシンスと同様に姿を消していた。災害級と災害級の戦いは、雷と台風が戦うようなもの。逃げた　彼らが一番正しい選択肢を選んだのは間違いない。

「待て、我を差し置いてこのような無礼な行いをするとはな。皆のものよ頭を垂れよ」
「きゃー！　クルクちゃんかっわいーっ！」

【破壊を尽くした悪魔の（略）軍勢の偉大なる王女（自称）】クルクまでもが参戦する。災害が三つ。
安全地帯として、フォルテの傍にいる一般人の少女は幼いのが幸いして、何かのアトラクション感覚で観戦していた。それを視て、フォルテは思わずため息を漏らした。そして彼女をアルシュに任せて、彼はどうやってこの場を治めようか、必至に頭を回転させた。
彼の胃痛が治る日は、くるのだろうか。
『十人会』。
これを視れば解るだろう。そして、ある人が一言呟いた。その言葉がやけに民衆の中に浸透し『十人会』という名前は忘れ去られた。
そして、多くの民衆は言う。
人外魔境、と。

閑話、「人外魔境」（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

005

始めに言わせて頂こう。
やっぱり俺は主人公だったということを。
あの人外二人との接触の後、俺は特に行くあても無く彷徨っていた。そして砂漠を抜け、平原についた時の事だ。ついに、こういう小説でよくある魔物らしきものに襲われた馬車が目に映ったのだ！
目の前には絢爛豪華な装飾をした馬車が、いかにもな動物に襲われていたのだ！
頑張って目を凝らしてみると、その動物は、こげ茶色の体躯に、ブタのような顔をし、ナニを隠す布があるだけという原始人じみた（？）格好をしている。もしこれを助けたら、美人の王女的な人がいて、俺のメインヒロイン的なポジションになってくれるのだ。
しかし、ここで問題がある。そう、俺の姿は、明らかにブタ側だ。これではどうしようもない。
だから俺は考えた。
マリアントワネットは言った。「パンが無ければお菓子を食べればいいじゃない」と。
そして、俺は言うのだ。「顔が醜ければ醜い側に行けばいいじゃない」と。
これを聞けばコイツキメェと思うだろう。だが、よく考えてみろ。ああいうのは、顔の整ったヤツ、もしくは最低でも普通の顔をしたヤツがやるからこそ意味がある。明らかに、前世も今も顔面がつぶれたようなものだった俺が行っても、すかさず攻撃してくることだろう。
もし助けても、利用するだけ利用され、ボロ雑巾のように捨てられるのは必須だ。もしツンデレな女だったら目も当てられない。
なら、ブタどもに加わったほうが俺の利益になるだろう。もしかしたらあのブタもどきもこんなストーリーがあるかも知れない。

「人間に刈られ俺達はもう絶滅するしかない！　人間は俺達を醜いといって目が合えばすぐに刃を向けてくる。弟も妹も全員殺されてしまった。ならせめて人間もろとも」

という感じで。基本的になんだかんだいってこういうのは人間が悪いのだ。よくある、森の中を歩いていたら魔物に教われ、一家を殺された魔物赦さないみたいなことがあるが、結局なわばりに入ったのは人間であって、むしろ魔物に罪はないだろう。

まぁ、でも、俺はいくら前世でいろんな人に嫌われていようと人だ。ということで、もしツンデレっぽい見た目やイケメンだったらスルー。その他だったら、目皿ビームで助けよう。ブサメンでも。なぜやら、なんというか、自分が殴られているような気持ちになるからだ。

おっと、進展があったようだ。

どうやら、出てきたのは、イケメン二人の兵士に、坊主のオッサン。

……これは、助ける必要あるのか？

明らかに、アームストロングなんだけど。なんか……むさい光景だ……。

俺は、スルーし、先に進んだ。

先に進むと、何かピラミッド的な遺跡のような物が目にはいったので、そこを今晩の宿にすることにした。　中に入ってみると暗く湿っぽい空間だった。いまにもお化けが出てきそうでガクブルなのだが、日焼けが恐ろしいので我慢だ。一応この体は乙女（おつおんな）である。それに元ひきこもりの性か暗いところは同時に安心感もある。

すると、何か階段のようなものが目に入った。

おりると、ひゅうという風の音に身が強張る。どうやら迷路のような構造をしているようだ。

と、ここで俺は気が付いた。もしやこれはダンジョンではないか、

と。

その矢先、一匹のでかい鼠が、俺の前に踊りでた。

006

現れた灰色のバスケットボールほどの大きさをした鼠は、赤い目を爛々とさせ、こちらを見ているような気がする。
明らかに仲良くはなれなそうだ。
俺はズリズリと後退し、降りてきた階段の方へと向かう。
戦うなんて選択肢は俺の中には存在しない。ただ合法的に裸体を眺めたいだけなんだっ！
しかし、鼠は俺に飛び掛ってきた。背を向けてダッシュしてもいいが、背中を見せるのは危険だ。こうなったら目皿ビームで迎撃するしかない。
鼠の顔が顔面一杯に迫ってきて、涙が零れるが、そんなこと言ってられない。
いけっ！　目皿ビーム！
しかし、なんと鼠が繰り出したのはアッパーカット。肉が波打ち、目も締まる。繰り出された目皿ビームは上へ――……そして、壁を砕き、瓦礫が雨のように俺と鼠に振りそそぐ。
……あ、もうこれ、駄目だ。

★
★

どうやら俺はまだ生きているようだ。
上を見上げてみると、”針の穴ほどの”穴が”遠く”に空いているのが解る。
なるほど、もしかしたらこれ、地下に来てしまった？
ここで、俺は思い出す。たいていダンジョンとは地下に行けばいくほど敵が強くなるはずだ。

よし、早く帰ろう。危険すぎる。
しかし、帰るのも危険だ。この迷宮（だんじょん）を歩かなければならない。つまり、八方塞がりだ。今のところ敵が居ないのが幸いか。
なんだってんだ。俺はただ裸体を求めてきただけなのに、こんなカビ臭く、魑魅魍魎がはびこるダンジョンなんかに――。
……まてよ？
確か、こういう系って存在進化（れべるあっぷ）するんじゃなかったっけ？
スライム、ゴブリン、コボルト、オーク、獣人みたいな順番で。
これは、きたんじゃないか？　俺の野望が達成が図らずとも可能なんではないか？
もしや、ステータスとかも見られたり……？　よし、ものは試しだ。

「コポォ！」（ステータス！）

……。

「コポォ！」（ステータス！）

……。

「コポォ……」（すてぇたす……）

……。
ふっ。人生はそうそう甘くないのだ。そんなステータスなんてでてくるおいしい設定があってたまるか。あんな、貧乳で、オタク趣味で、合法ロリな青い髪の鷲宮的な元高校生なんてリアルでいるわけないのと一緒だよ！　いてもどうせ腐ってるよ！
なにが「貧乳はステータス、希少価値だよ」って、当たりだよ！
ふざけ――。

レベル：一（存在進化まで、あと二十九レベルです）
名前：【スライム】
種族：【液体】
加護：【ぼくがかんがえたさいきょうのもんすたー】
スキル：【オカ魔眼】【ぴっころびーむ】【愚者の舞踏会】【イケメンホイホイ】【魅了（破）】【邪眼（じゃがん）】【威圧（塵）】【チンカラホイ】

……早く、新しい力が欲しいです……。

007

とりあえず、手にいれたスキルを確認してみよう。とりあえず解るのから。

【ぴっころびーむ】。

たぶんこれは、目皿ビームのことだろう。全体的に見て、実戦で使えそうなのは、コレくらいのものだろう。

【イケメンホイホイ】。

絶対これ無意味だし、余計だし、ふざけんな。俺の予想ではあるがもしかしたら、スライムのイケメンズが集まったのはこれの所為かもしれな。このスキルは間違いなく俺の覇道(ごうごうてきなのぞき)を阻むものに違いない。

【チンカラホイ】

よくやった！　本当によくやったよ！　これでスカートめくりも楽々だ！

【ステータス】

たぶん、これはステータスを見るスキルだと思う。ってことは、俺以外は、ステータス機能が無いってことだろう。でも、有用なスキルだ。

で、問題は残りだ。

【オカ魔眼】、【愚者の舞踏会】。

……使い方が解らない。しかし、ロクなスキルである気がしない。

【魅了（破）】、【威圧（塵）】。

（破）ってなんだろう。エヴ○？　あと、（塵）。たぶん俺の予想だが、発動した瞬間、相手を塵にするスキルだろう。だったら、おそらくテラチートスキルじゃね？

【邪眼(じゃがん)】。

中二病乙スキルだが、使えそうだ。要観察だ。

とりあえず、モンスター的な物に試したい。とりあえず影に隠れ

ながら移動しよう。
……っと。少し進むと、有名なカードゲームのベビードラゴンと、時の魔術師的な何かで出来るじいさん竜みたいな形で、闇が染み込んだような色をしたモンスターがいた。
とりあえず、使えそうなスキルからだ。【ぴっころびーむ】は何回もやっている。だから、とりあえず用途不明なヤツからだ。

「コポォ！」（【邪眼】！）

＞＞【邪眼】が発動されました＜＜

……おおっ！

＞＞補足した相手を邪な眼で見ています。警察に見つかったら職質される確率が上がります＜＜

使えねぇえええええええええええええ！
なにも意味が無いじゃねえかあああああ！　もっとこう、蛇睨み的なこと出来ねーのかよっ！
俺に力を与えたらしい人何やってんの！？
……まぁ、いい。これは使えなくても仕方が無い、という物だろう。
よし、じゃあ【オカ魔眼】、【愚者の舞踏会】を……。
この二つを口に出してみたが、どうやら発動できないようだ。たぶん、動作とかで発動するんじゃないか、と推測される。
次は、【魅了（破）】、【威圧（塵）】だ。正直、【魅了（破）】ってのは常に発動されるスキルだろう。【威圧（塵）】も、向かい合わないと駄目そうだ。
とりあえずレベルアップしたいので、あの竜を倒さないとならないだろう。どうやらあまりモンスターのいないこの階層でレベルア

ップし、晴れて存在進化したら、上に行き、晴れて獣人の仲間入りを果たそう。
そうきめ、影から目皿ビームあらため【ぴっころびーむ】の連発で、あの竜を倒せることを祈っておこう。
よし、覚悟を決めた。いけっ！　【ぴっころびーむ】っ！
きたっ！　竜の顔に当たり、その部分は少しこげ、……ただけ？
竜は怒り狂っているようで、こちらを睨みつけてきた。やばっ！
くらえ、【ぴっころびーむ】！

>>【ぴっころびーむ】は一日二回です。何故かと言うと、ラディッツ戦のときの魔貫光殺砲（まかんこうさっぽう）をを参考にして作られたからです。ちなみに、威力はラディッツを悟空を貫くレベルです<<

説明なげーし、全然使えねーなあもうっ！　こうなったら最後の賭けだ。ドラゴンはいまにも尻尾を振りかぶり、俺に叩きつけようとしている。
いけっ！　塵になれっ！

「こぽおおぉぉぉおおお！」（【威圧（塵）】ぅぅぅぅぅ！）

>>【威圧（塵）】が発動しました<<
>>少し半眼になります<<

神は、いなかったのだ……。
（塵）ってのはおそらく、「威圧にもなんねーよばーか！」ってことだろう。
いままでのことが走馬灯のように蘇る。
幼稚園のとき、鈴木さんに踏みつけられ、「貴方の顔ってつぶれてるわよね」って言われた。
小学生のとき、パンツを盗まれた。

中学生のとき、隣の女子が落とした消しゴムを拾ったら、「汚いっ！」て言われて口に突っ込まれた。
高校生のとき、修学旅行先で、パンツを盗まれた。
大学生のとき、入学式でサークルの勧誘が俺だけこなかった。偶然隣に居た同じ高校出身の鈴木さんは囲まれていたのに。
そして、死ぬ最後の会話。コンビニでの「チャック空いてます」は、小、中、高の三年間隣だった、口に消しゴムをつっこんだ鈴木さんだったような。

>>【魅了（破）】、【威圧（塵）】の発動により、合成スキル【美少女の涙目睨み】が発動しました<<
>>これにより、相手が異性の場合、動きが止まり、同性の場合、【狂戦士】状態になります<<
>>相手の動きは停止しました<<

……え？
つまり、今の状態的に、相手は、俺のことが、泣きそうな顔で睨みつけている美少女に見えているってこと？
主人公が「男は女の涙に弱いぜ（きりっ）」という状態ってこと？
もっと解りやすそうなたとえで言えば、ミルタンクの「メロメロ」ってことか。
逃げ出すか？　いや、どちらにしろこれは、レベルアップのために迫りくる問題だ。なら、やるしかない。しかし、使えるかもしれない残っているスキルは二つ。
【オカ魔眼】、【愚者の舞踏会】。
二つ目は使えそうだが、使い方が想像することが出来ない。しかし、魔眼というのなら、目。つまり、目を使う動作だ。と、言えば……ウインク！
そういえば、ウインクしてからあのイケメンスライムは固まったような……。よし、気にしないようにしよう。

コレは賭けだっ！　くらえっ！
ぱちっ。

>>【美少女の涙目睨み】と【オカ魔眼】の発動、さらに性転換により条件クリア。合成スキル【幻想殺し（イマジンブレイカー）】が発動されました<<
>>敵は、自分がネカマに恋をしたことに絶望し、砕け散ります<<
>>敵を倒しました<<
>>スライム　は　レベル　アップ　した　。<<
>>レベル　が　十　に　なった　。<<
>>スキル【肉体変化（メタモルフォーゼ）（塵）】を得、スキル【ぴっころびーむ】は【操気弾】に退化しました<<

どうやら……レベルアップ……しました。

レベル：十（存在進化まで、あと二十レベルです）
名前：【スライム】
種族：【液体】
加護：【ぼくがかんがえたさいきょうのもんすたー】
スキル：【オカ魔眼】【操気弾】【愚者の舞踏会】【イケメンホイホイ】【魅了（破）】【邪眼（じゃがん）】【威圧（塵）】【チンカラホイ】【肉体変化（メタモルフォーゼ）（塵）】

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6507y/

どうみてもスライムです。ああもう、嫌になる。

2012年1月6日21時31分発行